

## 現代の和歌が見える場所 御手洗靖大

春は各地で曲水の宴が行われる。京都では、三月中旬に北野天満宮、四月中旬に上賀茂神社、下旬に城南宮で行われる。コロナでどうなるかわからないが、神域での華やかな年中行事はニューズで観るだけでも明るい気持ちになる。

京都のそれぞれの曲水の宴とは少しだけ縁がある。北野天満宮は、二〇一六年に復興された。第一回のポスターは当時同志社大学の学生であった狩衣姿の私（後ろ姿だが）である。

菅原道真の顕彰とあつて、宴に召された男性詠者は盃を流す間に漢詩を作り、女性が和歌を詠む。漢詩を作るとは、藤原道長が生きた平安時代の考証に基づくもの。本来的な曲水の宴は即興の和歌ではなく、一晩かけて漢詩を作るものであった。

参仕する詠者は男女の番で四組。成人三組は京都の著名な文化人から選ばれてきている。残る一組は、京都の中、高、大の学生から選ばれており、地域に根づいた祭であることも忘れない。

和歌のアドバイザーは京都教育大学教授でもある京都歌会の植山俊宏。植山の指導力は大きく、祭に欠かせない存在である。その指導力は例えば、植山「中学生の和歌創作学習に関する実践的研究・百人一首にかかわる返歌、類想歌創作の試み」(「教育実践研究紀要」京都教育大学二〇一八年三月)などだろうか。私はコロナ騒動となる前の二〇一九年まで雅楽の演奏で参仕した。

上賀茂神社は、現代の葵祭の主役となった齋王代が一年間の最後の奉仕として、歌人に歌題を披露する。加茂社としても重要な神事として位置づけられている。

かつて永田和宏・河野裕子夫妻が歌人として参仕していたが、現在は永田紅が両親の役を継いでいる。永田ほか三枝昂之らが歌人として召される。また、下冷泉家(室町時代に分岐した冷泉家の分家)の当主も参仕しており、注目される。

現代歌人による和歌的な題詠とともに、霞会館(旧華族組織)会員による「和歌」も垣間見ることができるのである。そして詠まれた和歌は冷泉家の門人によつて「和歌」として披露される。現代短歌と和歌がぶつかりあう空間といえよう。

城南宮は、コロナにより二〇二〇年の催行が中止となったが、代わりに献詠祭を行った。私も歌人として歌を奉納した。ぜひとも曲水の宴にも歌人として参仕できたらと思う。参仕する歌人は富貴高司、楠誓英、江畑實といった現代歌人と、書家である。歌題は和歌にちなんだものであり、現代歌人はいかに和歌の題詠を詠むのか、注目に値する。

盃が目の前にくるまでに歌を詠む——歌会というところをイメージする人も少なくない——という掟は、室町時代の故実書『公事根源』から見え、これ以降広まったようである。この故実書は応仁の乱後の王朝復古の時代に、平安の雅を志向して書かれた。

平安時代の儀礼復興とするなら、曲水の宴で披露されるべきは漢詩である。ただ、現代歌人が和歌らしく歌を詠む現代の曲水の宴も、『公事根源』と同じく平安の雅を志向してのものである。六〇〇年前と同じ心で雅を求めるのも悪くはない気もする。